日本色素細胞学会学術大会

Japanese Society for Pigment Cell Research



美白剤による治療 update

日 時: 2022年11月13日(日) 12:10~13:10 ランチョンセミナー

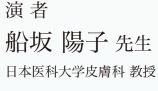
会場:ステーションコンファレンス東京

住 所: 〒100-0005 東京都千代田区丸の内1-7-12 サピアタワー5F

座長

錦織千佳子先生

兵庫県赤十字血液センター所長、神戸大学名誉教授







(Abstract)

美白剤の作用機序としては、メラノサイトの増殖抑制、メラニン産生の抑制、表皮角化細胞へのメラニン受け渡しの抑制、表皮のターンオーバーを亢進させてメラニンを速やかに排除する、周囲角化細胞や線維芽細胞からのメラノサイトの刺激の抑制などがあげられる。従ってメラノサイトに加え、パラクリン作用を示す光老化の変化を受けた角化細胞や線維芽細胞なども美白剤の標的細胞となる。チロシナーゼに強い阻害作用を示すハイドロキノンは60数年前より強力な美白剤として広く使用されてきた。ハイドロキノンとレチノイン酸、ステロイドを併用したKligman's formulaやtriple creamが最もしみの治療に効果が高いとされている。しかしながら高濃度のハイドロキノンは色素細胞に対する細胞毒性を有し、また真皮内に色素沈着をきたすオクロノーシスを生じることより注意して使用する必要があった。近年、チロシナーゼの拮抗阻害薬とされるthiamidol®(isobutylamidothiazolyl resorcinol)やシステアミン塩酸塩含有クリームがハイドロキノンよりもより安全かつ治療効果が高いとの報告が相次いでいる。これら美白剤のメラニン生成に対する作用メカニズムを概説する。

当セミナーはハイブリッド開催となります。参加方法や詳しい情報につきましては、本会HP(http://jspcr31.umin.jp/)をご確認いただきますようお願いいたします。

第31回日本色素細胞学会 学術大会 ホームページ >>



